式　辞（令和５年度厚真町戦没者追悼式）

本日ここに、戦没者のご遺族並びにご来賓の皆様のご参列をいただき、厚真町戦没者追悼式を執り行うにあたり、戦禍の犠牲となられました御霊（みたま）に対し、厚真町民を代表して謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦が終わりを告げてから、78 回目の夏を迎えました。祖国の平和と発展を願い、また家族の安泰を念じ、苛烈を極めた戦場に倒れた方々、あるいは戦後、異郷の地に残され、飢えや病に倒れ、祖国に帰ることが叶わなかった方々に思いをはせるとき、尽きることのない悲しみが胸にこみあげてまいります。

一方で最愛のご家族を失われ、筆舌に尽くしがたい悲しみに耐えられ、立派にご子弟を養育されながら地域社会の安定、発展に貢献されてこられましたご遺族の皆様のご努力に対して、ここに改めて深甚なる敬意を表します。

現在の日本の平和と繁栄は、戦没者の方々の尊い犠牲の上に築かれていることを、改めて私たちは正しく認識し、その使命と次世代に対する重い責任を自覚する必要があります。

近代日本が辿った紛争解決のための武力行使を深く反省し、教訓として戦争を放棄した我が国ではありますが、戦争を直接知らない世代が多数を占めるようになった今、過去の歴史に謙虚に向きあい、戦争の悲惨さと、核の功罪を明らかにし、決して人類の未来が閉ざされることのないよう、平和の尊さ、平和を堅持する努力を私たち世代が率先垂範し、その智慧を次の世代にしっかりと継承していかなければなりません。

戦争の惨禍を、二度と繰り返さない。我が国の恒久平和への誓いは、昭和、平成そして、令和の時代においても決して変わることはありませんが、今もなお、世界中で地域紛争が繰り返され、世界をリードする国の一つであるロシアが隣国であるウクライナに侵攻して始まった戦争は既に１年６カ月にも及びます。一般市民を巻き込んで尊い命が失われ、多くの方々が傷つき苦しみの中にあります。早期の停戦が望まれますが、何が、人類を争いへと駆り立てるのでしょうか。情報が一瞬で世界中に伝搬する中にあってなお、無秩序な権益拡大という野望や外交交渉は市民を置き去りにしてしまうことを私たちは幾度も目の当たりにしています。地球市民として民族や宗教、主義や思想の違いを乗り越え、分断から寛容の時代へと国家間の相互理解を進めていかなければ、今後もこうした愚かな紛争を断ち切ることは難しいのかもしれません。

大戦の当事国であり唯一の被爆国である日本は、今年の Ｇ７首脳会議を広島で主催しました。積極的平和主義を掲げている日本が、被爆地だからこその視点を議論に生かせたかという評価はわかりませんが、少なくとも参加国首脳が現地で献花を手向けた事実は色あせることはありません。粘り強く外交を通して国際平和にさらに積極的に貢献できることを願ってやみません。小さな一歩であっても、決して偏らずに民間交流の深化とともに、地域におけ

る取り組みや私たち一人ひとりの平和を希求する努力も大切です。

夢と希望に満ち溢れた平和な世界を未来の子どもたちへと引き継いでいくために、いま私たちがなすべきことを心に深く問い、時代認識を常に新たにしていかなければなりません。

北海道胆振東部地震の発災からまもなく５年を迎えます。この場をお借りして、震災における犠牲者とご遺族の皆様に、改めて哀悼の意を表しますが、私たちは、誰よりも命の大切さを知っています。平和と民主主義のもとで、国民の命と暮らしが守られ、次の世代を担う子供たちが、ふるさとの明るい未来を切り拓いていけるそんな社会を町民一丸となってこれからも守り通してまいります。

終わりに、戦没者の御霊の安らかならんことを、そして、ご遺族の皆様のご多幸をお祈り申し上げまして、式辞といたします。

令和５年８月２５日

厚真町長　宮 坂 尚市朗